



あのとときの常呂・写真館

VOL 121

(1986年)

昭和61年8月17日

サヨナラ湧網線 仮装盆踊り大会

▶この催しは、8月15、16日の2日間続いた「ところふるさとまつり」の翌日開催されました。下記の「広報ところ」9月号では、第7回のふるさとまつりと一緒にページの半分を使って趣旨と内容、審査の結果を伝えています。



△テレビの人気者も登場した仮装盆踊り

近々に廃止予定とされている湧網線に別れと感謝の気持ちを込めて「何か思い出に残ることをしよう」と常呂町商工会が主

サヨナラ湧網線 仮装盆踊り大会

常呂駅前で町民を魅了

催、商工会青年部（高橋浩三部長）が中心となって企画した「サヨナラ湧網線仮装盆踊り大会」。



八月十七日午後六時、会場となった常呂駅前には、地元常呂をはじめ近隣市町からユニークな仮装が次々と登場。町民や帰省中の人達、旅行者など約千人の観衆が二時間にわたって、去りゆく夏と湧網線を惜しむ行事に心ゆくまで楽しみました。

(3)

▶湧網線廃止の経過簡略メモ：昭和59年6月の運輸大臣による第2次廃止対象路線承認以降、湧網線の廃止を前提に地元対策協議会が開かれますが、湧網線沿線自治体は「乗って残そう湧網線」などの運動を通して存続の道を探します。●一方、昭和56年から検討が続き、道に判断を託した釧路一網走一紋別一稚内を鉄路で結ぶオホーツク本線構想が昭和59年12月に実現困難の結論に至ります。●昭和60年は鉄道の代替輸送協議に移り、昭和61年3月号の「広報ところ」（次ページ）で「鉄路存続断念！湧網線もバス転換に決定」の見出しを付け、1ページを割いて廃止決定までの経過を町民に説明しました。



鉄路存続を断念！ 湧網線もバス転換に決定

国鉄赤字ローカル線の第二次廃止対象線となっている湧網線（網走―中湧別間八十九・八キロ）の第三回特定地方交通線対策協議会会議が二月十七日、沿線一市四町の代表者を集め、網走市で開かれました。

会議では、第三セクターによる鉄路存続は資金・経営両面から難しいことを理由に「バス転換」の方針を決定しました。

今回は、湧網線のバス転換の経緯について、町長一筆の中で齊藤町長からお話しをしてもらいました。

町長一筆

湧網線の存続問題については、皆さんの理解と協力をいただきながら、関係する市や町とともに、存続運動を続けてきました。が、遂にバスに転換をせざるを得なくなりました。全く残念の至りです。

例えば高度経済成長に伴い、自動車の増加、道路網の整備などが進み、汽車の利用減がはじまり、さらには国鉄の合理化として、間引運転、駅の無人化、貨物の廃止などが行われました。また、国鉄の経営悪化により、昭和五十五年には、国鉄再建整備法が施行され、湧網線は第二次廃止路線に指定されましたが、遂に運輸省から廃止の承認がなされました。

この間、絶えず存続運動は続

けてきましたが、国鉄再建は国の行政改革、財政再建の目玉として位置づけられ、民営分割化が叫ばれるに至って、関係者の必死の存続努力も空しく、遂に廃止を前提としたテーブルに着かざるを得ないことになりました。

た。

運輸省、国鉄、そして湧網線沿線の関係者らが集まり、今後の湧網線のあり方について検討されました。会議では「第三セクターによる存続」と「バス転換」の二通りの代替輸送が話しあわれ、第三セクター方式で存続した場合、五年目まで差損の五割を補助する法律補助を受け、六年目で運営基金が底をつき、赤字に転じる。これに対してバス転換の場合は、最初に積んだ基金額が十五年目の期末でも維持できるという試算結果をもとにして検討されました。

結局、鉄路の存続を願ひ、そ

の方法を検討していたものの、資金面などから運営が難しかったため、代替輸送としてバス転換は止むを得ないという結論になりました。

今から五十年前、先人の方々が手弁当で陳情を重ねて、昭和十一年住民歓呼の中に初列車を迎えて（網走―常呂間開通）以来、五十年にして終止符を打つことは、先人のご苦労をなされた方々に対して申し訳なく、まことに残念です。時代の変化により、乗る人が激減している現状から、止むを得ない措置としてご了承いただきたいと思ひます。

道内では二月に入ってから瀬棚線、胆振線、富内線、広尾線そして湧網線と相次いでバス転換の方向を決定しています。

これからの問題としては、バス転換に当って、会社をどうするのか、路線をどのようにするのかなど、いろいろと検討していかねければならないことが残されています。

今後は、議会をはじめ町民の皆さんのご理解を得て、バス輸送が地域の立派な足となるよう検討していききたいと思ひます。



常呂鉄橋付近を走る汽動車。この姿もあとわずか……